



## 障害のある人の思春期における 発達と教育実践

特集にあたって

楠 凡之

障害のある人の「思春期」が語られるとき、その「困難さ」「不安定さ」が問題にされることが多い。もちろん、生理的レベルでも大きく変容するときであるだけに、「困難さ」「不安定さ」に結びつきやすいのであるが、思春期のもつ発達の意義は、障害のある人にとってもきわめて重要であることは決して見失われてはならない。

本誌では、73号(1993.5)で「思春期と障害」を特集して以降、思春期の発達を真正面からとりあげた特集は組まれていない。また、特別支援学校中学部の実践については小学部や高等部との接続のなかで語られることが多いが、思春期という発達の時期を踏まえたその固有の価値を明らかにすることも重要な実践課題であろう。

本特集では、人間発達における思春期という時期の普遍性と個々の子どもの障害による固有性を統一的に捉えつつ、思春期の発達保障の取り組みを理論と実践の両面から提起していきたい。

白石恵理子は、障害の重い人にとっての思春期について、感受性の高まり、身体変化に伴う心理的葛藤、他者視点に対する過敏さ、異性への関心の高まりなどの観点から捉えつつ、思春期に求められる教育実践と特別支援学校中学部の課題について整理している。松島・羽山は、特別支援学校中学部教員へのインタビューを通して、教師から見た思春期の発達の特徴と関係性の変化、中学部に固有のカリキュラムと教育方法、そして、教師の関わり方の課題を考察している。垂髪は近江学園、あざみ寮、びわこ学園の職業教育を中心とした実践史とそこでの糸賀一雄の思想の発展過程

を、「重症児の生産性」の提起を紹介しつつ考察している。

実践報告では、放課後等デイサービス指導員の益本は思春期を迎えた女子生徒の恋心やお姉さん心の育ちと葛藤をリアルに描きつつ、その成長過程を「覚悟」をもって支えぬく実践を報告している。与謝の海特別支援学校中学部教諭の石田は、中学部から転校してきた、当初は激しい問題行動を表出していた男子生徒が七夕音楽祭などの学校行事の取り組みの中で、葛藤を経ながら成長を遂げていく過程を描きつつ、思春期における文化活動の意義を提起している。片山は、高等部から医療型障害児施設に入所した重度心身障害の女子生徒への訪問学級の実践で、この女子生徒のおしゃれや芸能人への憧れを共感的に受けとめた活動を展開しており、そこから他者との豊かなつながりを創造している。尾崎は自閉症の我が子の20年間の育ちを振り返りつつ、我が子の思春期の恋愛感情からくる行動や性的な関心の高まりに時には戸惑いながらも、一個の人格をもつ存在として我が子の意思を尊重しながら関わってきたプロセスと自らの思いや願いを生き生きと描いている。

今回、とりあげた実践現場は多様であるが、いずれの報告も思春期を豊かに生きる権利を保障する教育への熱意が伝わってくるものであった。

本特集が、障害の程度にかかわらず、思春期という人生のかけがえのない時期を豊かに生きる権利を保障する教育実践の課題と方法を考える契機にしてもらえることを心から願っている。

(くすのき ひろゆき 北九州市立大学)